

米内利明氏収集資料について

石川 朗*・澤田恭平*

はじめに

ここで紹介する資料は、釧路市内で教職を務める傍ら、釧路考古学研究会の一員として遺跡踏査を行った故米内利明氏が収集したものである。

これらには、縄文晩期後半から続縄文前半の土器型式に関わる資料が含まれており、小稿ではそれらの図化、記載を行うとともに、当時の調査動向を整理する。冒頭ではあるが、資料の重要性を理解され寄贈頂いたご遺族に改めて感謝申し上げたい(註1)。

1. 米内氏の略歴および資料の概要

氏は1932年に出生し、釧路高等學校・北海道教育大学釧路分校を経て、1953年から春採中学校を始めに市内の中学教諭として勤務された。

高校時は釧路學生考古学研究会(山田1960)に加わり1949年に行われた北海道大学と釧路市立郷土博物館による東釧路貝塚の発掘調査(名取1950)に参加、大学時は岡崎由夫教授の地学研究室に所属していた。春採中学校在任期(1953~1967年)には緑ヶ岡在住の太田武志氏などこの地域の遺跡踏査を行っていた(註2)。

表1は、氏からの聞き取りや遺物注記をもとに調製した一覧である。遺物総数は、1,820点(土器類:1,379、石器:434、骨角器:1、土製品:4、その他:2)で、ほかに動物遺体が1,268.4gある。

採集地が明らかなものは、土器9点(完形7、破片2)、石器61点(全て石斧)で、釧路市幣舞・緑ヶ岡・武佐・興津・桂恋・三津浦、釧路町天寧、浜中町霧多布・琵琶瀬の各地点が確認できる。

そのほかは不明とせざるを得ないが、収集時期が氏の春採中学校在任期に限定されること、氏がこの間に行われた釧路市立郷土博物館の発掘調査に漏れなく参加していた状況などから、緑ヶ岡遺跡や東釧路貝塚など旧釧路市域での収集物が主体をなすものとみて大過ない。

	名称	点数	備考
土器	東釧路Ⅲ	5	
	東釧路Ⅴ	25	
	北筒式	49	
	手稻・堂林式	4	
	晩期後半 ~続縄文前半	1,160	大洞式破片:幣舞2 興津式個体土器:幣舞1 材木町or緑ヶ岡2 興津3 下田の沢式個体土器:ムサ1
	後北B~C2D式	11	
	北大式	2	
	土師器	1	
	須恵器	1	
	擦文	46	
トビニタイ	75		
	小計	1,379	
石器	石鎌	19	
	石錐	2	
	石槍またはナイフ	24	
	つまみ付ナイフ	10	
	柄付ナイフ	3	
	削器	218	黒曜石:178 安山岩:34 チャートet.6
	搔器	33	
	石斧	102	テンネル:38 ムサ:6 桂恋:5 三津浦:1 霧多布:2 ピワセ:2 M(緑ヶ岡):7 判断不能・注記なし:41
	たたき石	6	
	砥石	11	
石錘	6		
	小計	434	
骨角器	骨斧	1	オホーツク文化期(釧路以外とみられる)
	小計	1	
土製品	鞆羽口	3	
	紡錘車	1	
	小計	4	
その他	葉きょう	1	米軍12.7mm機銃
	おはじき	1	玩具・ガラス製
	小計	2	
	総計	1,820	

表1 米内利明資料一覧

2. 資料(図1、2)

1は、1957年2月に旧釧路公民館解体工事(幣舞遺跡)で発見され関係者から譲り受けたもので氏はこのほかに現地で須恵器片を採集している(註3)。またこの個体は、芹沢長介氏撮影の画像付きで紹介されている(澤1959、芹沢1960、澤

1964a)。発見経緯はこれまで富士見坂道路新設工事とされていたが、前年の12月に竣工しており氏からの聞き取りどおりに訂正する(遠藤1957、釧路公民館編1992)。

口径10.0cm、底径5.0cm、胴部最大径11.7cm、器高20.1cm。口縁の一部を除きほぼ完形。

器形は、胴部中位が括れた瓢様の深鉢。上下の胴部径がほぼ等しく均整のとれた形態をなす。口縁は短く外反する。底面は平坦で緩やかに開き胴部に移行する。口縁部には小孔を穿ったボタン状の貼付4個を配置しその後、無節Rの縄線が3

条施される。縄線は突起の縁取りにも用いられる。

胴部文様は単節RL多条縄文で、施文方向は器体に対し左上→右下。内面は横位のヘラケズリ調整が行われている。

2、3は、材木町または緑ヶ岡で担当生徒が発見したもの。いずれも最大径が胴部中～上位に位置する小形の深鉢で口縁は外反する。

2は、口径7.8cm、底径6.0cm、現高9.8cm、胴部最大径7.7cm。口縁と底部を部分的に欠損する。底面は平底。胴部文様は単節RL多条縄文で、施文方向は器体に対し左上→右下。

3は、推定口径6.8cm、底径4.2cm、現高8.5cm、胴部最大径7.0cm。口縁から胴部上半の約半周を欠損する。口縁の低い突起は対応する位置と対をなすものとみられる。底面は上げ底。無文でヘラ状工具や指頭による調整痕を認めるが粗雑でひび割れや凹凸が顕著である。

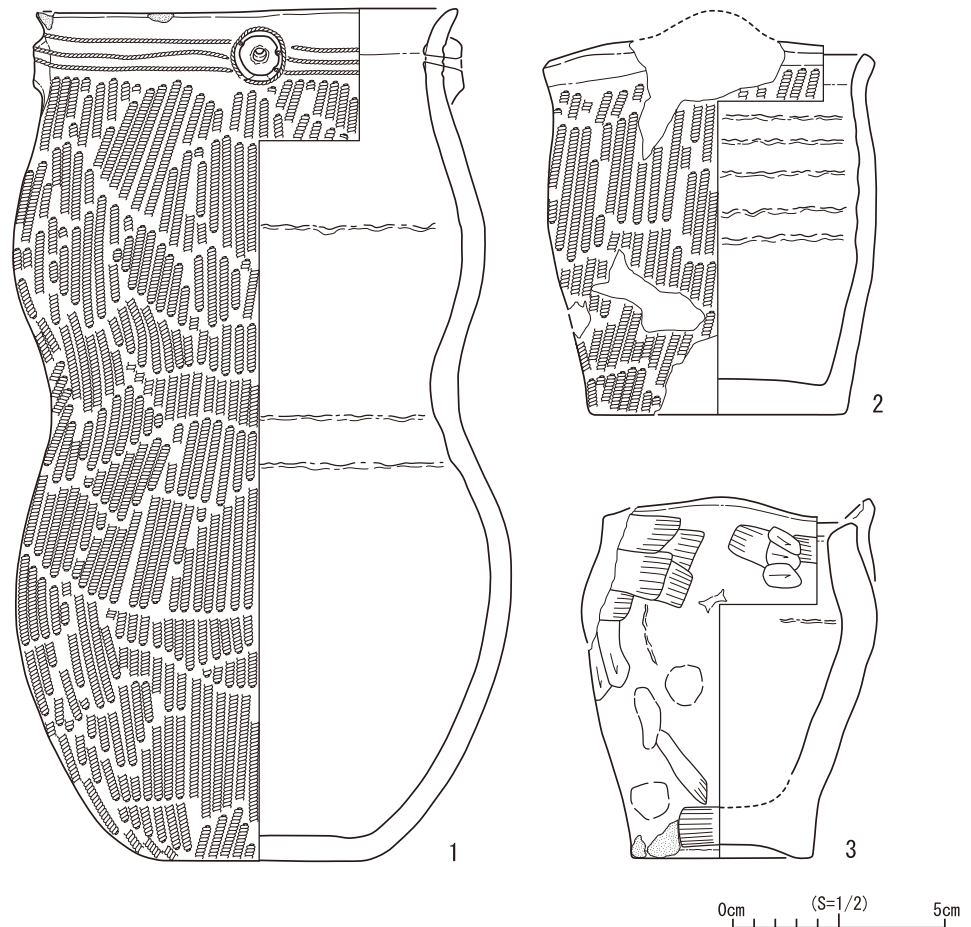


図1 米内資料1

4～6は、担当生徒が興津で発見した壺。これらの出土位置は、興津遺跡における遺物採集に関する記載(澤1978)から1976～1978年に発掘調査が行われた釧路段丘面ではなく、その崩落によって形成されたとみられる狭い平坦面(Ⅱ面)または調査地東側のポンオコツナイ川右岸の低位面(Ⅰ面)と考えられる。

4は、口径3.6～4.3cm、器高6.0cm、胴部最大径6.1cm。完形。頸と肩部の分化が不明瞭で、底面は丸底。口唇に一对の山形突起があり、突起間を長軸に上面観は楕円形をなす。文様は、口縁に7条の縄線を施した後、突起下に小孔が穿たれる。口唇および胴部から底面にLR縄文が施される。胴部の施文方向は、器面に対して横位を基本とする。内外面に赤色顔料が付着する。

5は、口径6.8cm、器高10.6cm、胴部最大径10.8cm。口縁と底面の一部を欠損する。4、6と

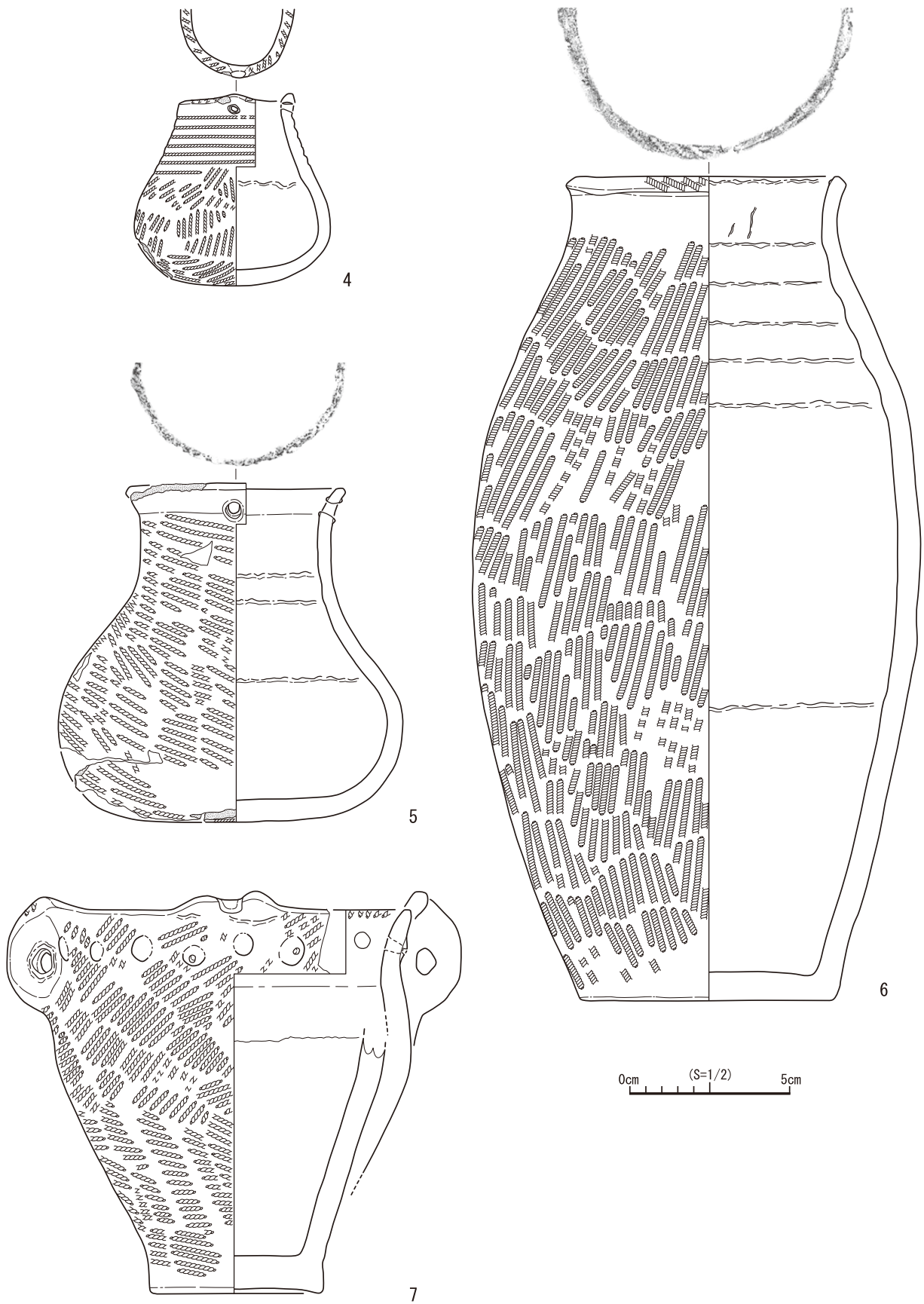


図2 米内資料2

比較し頸部は明瞭ではほぼ直立し、口縁は外反する。底面は平坦。文様は、口縁に一对の貫通孔があるほか、口唇および胴部から底面にLR縄文が施される。胴部の施文方向は、器面に対し上→下。内外面に赤色顔料が付着する。

6は、口径8.2cm、底径7.8cm、器高25.8cm、胴部最大径14.0cm。口縁の一部を除きほぼ完形。胴部は紡錘形様をなす。口縁は短く外反し、底面は平底。文様は胴部と口唇に単節RL多条縄文が施される。施文方向は器面に対し左上→右下。

7は、1962年に武佐地区で行われた選炭汚水沈殿池工事で発見されたもの。採集位置は、過去に武佐沈殿池第1～4地点と記載されたいずれかと考えられる(澤、西1975)。

推定口径10.7cm、底径5.4cm、器高12.5cm、胴部最大径11.2cm。口縁から胴部上半の約半周を欠損する。深鉢形。底部から直線的に開き胴部中位で丸みを帯び、口縁部直下で窄まったのち外反する。底面は揚げ底で接地部は弱く外反する。口縁部の相対する位置に縦耳と2個1組の山形突起が配される。文様は、口縁内面からの突瘤と胴部及び口縁内面に施された単節LR縄文である。施文方向は、表面が器面に対し左上→右下で胴部下半の条は横走する。口縁内面は水平方向を示す。

3. 当時の調査動向

紹介した資料のうち1～6と7は、今日までに取りまとめられた興津式(澤1982)および下田ノ沢I式(大沼1972)にそれぞれ相当する。戦後、北海道における縄文土器研究の課題の一つに「前北式土器の細別と編年」があり、1950年代以降、各地の研究者を中心に取り組みが進められた(大沼1977)。釧路地方の動向について初期の頃も含め列記すると以下ようになる。

1917年 幣舞：佐藤直太郎遺物採集

1949年 幣舞：佐藤直太郎の遺物採集

—この頃— 緑ヶ岡：太田武志の遺物採集

1951年 緑ヶ岡：日東化学社宅建設工事に係る遺物採集 (澤1964b)

緑ヶ岡：干場政廣の遺物採集

1953年 5月 河野広道：釧路地方の土器総覧

(宇田川編1981)

7月 山本正夫：釧路地方初の土器編年
発表 (山本1953)

1955年10月 幣舞：富士見坂道路新設工事に係る
遺物採集 (片岡1956)

1957年 4月 幣舞：公民館解体工事に係る遺物
採集 (澤1959)

1958年 2月 幣舞：公民館建設工事に係る遺物
採集 (澤1958)

5月 澤四郎：釧路在住開始 (西1999)
興津：関本善八の遺物収集

(澤田2016)

1959年 緑ヶ岡：予備調査 (澤1964b)
河野、釧路緑ヶ岡式の提示 (河野1959)

1961～1964年：緑ヶ岡遺跡第1～4次発掘調査

1962年 阿寒町シュンクシタカラ、殉公碑公園遺
跡発掘調査 (澤ほか1963)

1963年 阿寒町オネササルンペツ遺跡発掘調査
(澤ほか1965)

1965年 白糠町オネチカップ遺跡発掘調査
(澤ほか1966)

1966年 厚岸町下田ノ沢遺跡第1次発掘調査
(前掲大沼)

こうした経過のなかで、釧路緑ヶ岡、幣舞、興津などの諸型式が提示され、阿寒町内遺跡の報告の頃に現在に繋がる編年骨子がつくられた。一方でこの間には東釧路や大楽毛遺跡などの調査も行われ、過密な調査環境にあった。そうした事情も十分勘案しなければならないが、上記の諸型式は、基礎資料の開示が断片的であり、それに起因して編年的位置が明確性を欠くといった経緯があったことなどから、それらに対する理解を複雑にしたことは否めない(福田2007)。

釧路地域で「細別と編年」の取り組みが開始されてからすでに70年ほどが経過している。現在では諸兄によって、土器型式の詳細や極東ロシアを包括した文化動態が緻密に編まれ始めている(前掲福田、熊木2018)。その意味で小稿は「後出し・遅きに逸した」誹りを拭えないが、今後も基礎資料の開示を丹念に進めてまいりたい。

【註】

註1 この調査では米内氏からの聞き取り・実測を澤田が、整理・集計を石川が担当し、両名協議の上、石川が筆耕した。資料は2014年8月20日付けで寄贈を受けた。

註2 太田氏は米内氏より1歳年上で東釧路の調査に参加している。同氏が採集した遺物には緑ヶ岡出土の舟形土器などがある。

註3 その一部を佐藤直太郎(当時市立釧路図書館長)に分与した。表中の須恵器は、この時の採集品とみられる。

【参考文献】

- 遠藤四郎. 1957. 都市計画街路北大通富士見坂新設道路, 釧路博物館新聞62:1-2. 釧路市立郷土博物館, 釧路.
- 宇田川洋(編). 1981. 河野広道ノート考古篇, 1:3-4. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 大沼忠春. 1972. IV-4土器, 北海道厚岸町下田ノ沢遺跡, 21-28, 厚岸町教育委員会, 厚岸.
- 大沼忠春. 1977. 北海道考古学講座6続縄文期, 季刊北海道史研究, 12:68-80. 北海道史研究会, 札幌.
- 釧路市公民館(編). 1992. 42年間のあしあと, 公民館42年の記録, p3-10. 釧路.
- 熊木俊朗. 2018. オホーツク海南岸地域古代土器の研究. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 河野広道. 1959. 北海道の土器. 郷土の科学23. (1972復刻:河野広道著作集, II:282-308. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 片岡新助. 1956. (表紙写真解説), 釧路博物館新聞, 51, P1. 釧路市立郷土博物館, 釧路.
- 澤四郎. 1958. 幣舞出土の土器, 釧路博物館新聞, 9:8. 釧路市立郷土博物館, 釧路.
- 澤四郎. 1959. 幣舞出土の土器, 釧路博物館新聞, 94, P8. 釧路市立郷土博物館, 釧路.
- 澤四郎ほか. 1963. 第1篇北海道阿寒町布伏内シュンクシタカラ遺跡発掘報告, 北海道阿寒町の文化財先史文化篇, 1:5-44. 第2篇北海道阿寒町殉公碑公園遺跡発掘報告, 同, 1:45-70. 阿寒町教育委員会, 阿寒.
- 澤四郎. 1964a. 図版解説224, 日本原始美術, 1:186. 講談社, 東京.
- 澤四郎. 1964b. 釧路地方の埋蔵文化財破壊の現状(3), 釧路市郷土博物館館報154・155:7-8, 釧路市立郷土博物館, 釧路.
- 澤四郎ほか. 1965. 第1篇北海道阿寒町阿寒湖畔オンネサルンベツ遺跡発掘報告, 北海道阿寒町の文化財先史文化篇, 2:1-24. 阿寒町教育委員会, 阿寒.
- 澤四郎ほか. 1966. 第1篇オンネチカップ(西庶路)遺跡調査報告, 北海道白糠町の文化財, 1:1-12. 白糠町教育委員会, 白糠.
- 澤四郎, 西幸隆. 1975. VII釧路湿原周縁の遺跡分布, 釧路湿原総合調査報告書, P301-336. 釧路市留津郷土博物館, 釧路.
- 澤四郎. 1978. III遺跡について. 釧路市興津遺跡発掘調査報告, II:4-7. 釧路市立郷土博物館・埋蔵文化財調査センター, 釧路.
- 澤四郎. 1982. 釧路地方の土器, 縄文文化の研究, 6:94-102. 雄山閣, 東京.
- 澤田恭平. 2016. 興津式土器標式資料についての考察. 釧路市立博物館紀要, 36:7-14. 釧路.
- 芹沢長介. 1960. アート図版解説89. 石器時代の日本, P272. 築地書館, 東京.
- 名取武光. 1950. 北海道考古学界の動き(昭和24年度), 考古学雑誌, 36-1, p49-51. 日本考古学会, 東京.
- 西幸隆. 1999. 釧路考古学の先達2. 5月2日付釧路新聞, 釧路.
- 福田正宏. 2007. I-2-1幣舞式を再考するための前提, 極東ロシアの先史文化と北海道, p72-74. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 山田稔彦. 1960. 釧路学生考古学研究会当時の思い出, 釧路の古代文化, 2:16-17. 釧路考古学研究会, 釧路.
- 山本正夫. 1953. 釧路地方出土土器の研究, 釧路市立郷土博物館館報, 20:3-5. 釧路市立郷土博物館, 釧路.